

2025年2月23日 降誕節第9主日礼拝メッセージ

「力は弱っている時にこそ発揮される」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅱ 12章 1-10節

先程歌った2つの賛美歌「主われを愛す」と「み恵みを受けた今は」は、それぞれ『讚美歌 21』では口語訳されていますが、以前の『讚美歌(1954年版)』では文語訳でした。ですが、歴史的には更に古く、「主われを愛す」は今から150年以上も前の明治初期に、日本に伝えられ、1903年発行の賛美歌集には、先程の歌詞が載っているそうです。2つ目の「み恵みを受けた今は」の方は、それに比べると少し時代が下りますが、1931年発行の賛美歌集に掲載されているそうです。

「主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらず。

わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す」

(「主われを愛す」文語訳1節)

「み恵みを身に受ければ、我らも今は強し。み力により頼みて、み戦の先に立たん。

いざ進め、たゆみなく、いざ歌え、声高く。み言葉に従いて、我らも今は強し」

(「み恵みを受けた今は」文語訳1節)

どちらの歌も、「強さ」と「弱さ」という言葉がキーワードとなっていて、「聖書の御言葉を信じ、従っている私たちには、神様が共にいてくれるから、恐れることはない、雄々しく突き進んで行こう」というような勇ましい歌になっています。これらの歌が、翻訳されて人々によって歌われ、広まっていった背景には、その時代が関係していたと思います。明治になるまでは「邪教」として禁じられ、排斥され、忌み嫌われていたキリスト教が解禁された。そして社会全体も、近代国家の成立と学制に基づいて、それまでの「お家」中心主義から、一人一人が個別に戦争のために「徴兵」されて行く、そのために「個人」に目が向けられる社会へと変わっていった時代でした。正義や真実とされることが、人為的に動かされていった時代の中で、何が揺るぎない「真理」「正しさ」「強さ」であるか、ということが、人々の関心を惹いたのだらうと思います。

そして、そのような時代に、これらの賛美歌を歌い継いで行った方々の心の中にあっただのは、「たとえ今は理不尽な目に遭い、辛い境遇にあったとしても、大義名分、真理は自分たちにこそある。自分たちは聖なる戦争を戦っている」という思いではなかったかと想像します。さらにアジア太平洋戦争が終わった後も、「戦争」は、高度経済成長時代の経済戦争や、また学歴差別社会の中における受験戦争など、その名前と場所を変えただけで、「人よりも自分が上に立つ」ことを目的とする構造は何も変わって来ていないように思います。しかし、本当に「キリスト教を信じているから、強く、正しく、恐れることなく、雄々しくあれる」のでしょうか。それがイエス様が身をもって伝えられたメッセージだったのでしょくか。どうでしょう。

先週、私たちは「マタイによる福音書」5章 3-12節から、「幸い」について聞き

ました。

「心の貧しい人々は幸いである／悲しむ人々は幸いである／へりくだった人々は幸いである／義に飢え渴く人々は幸いである／憐れみ深い人々は幸いである／心の清い人々は幸いである／平和を造る人々は幸いである／義のために迫害される人々は幸いである……」

同じようなお話が書かれている「ルカによる福音書」6章 20-23節の方が、より具体的です。

「貧しい人々は幸いである／今、飢えている人々は幸いである／今、泣いている人々は幸いである……」

本当にそうでしょうか。今日もこの礼拝の後、私たちは生活困窮者の方々が多く暮らしておられる釜ヶ崎のためのおにぎり作りをします。様々な物の値段が上がっている中、お米も値上がり激しいですが、そのような中でも、私たちの小さな取り組みを覚えて、お米を献品して下さったり、古着を献品して下さったりする方々がおられることに感謝です。今日もおよそ180個ほどのおにぎりを作って、お届けする予定です。この厳しい寒さの中、百人を超える方々が列を作られて、順番におにぎりを受け取られて行きます。炊き出しの列に並ばれている方々に対して、「今、貧しくて、飢えているあなた方は幸せですよ。聖書にそう書いてあります」などと、誰が言えるのでしょうか。仕事があり、食べる物があり、着る物があり、暖かい部屋や布団がある私たちが、それらを持たない方々に対して、僅かばかりの炊き出しをしながら、「あなたたちは幸い(幸せ)です」とは、間違っても言えたものではありません。だとすると、この聖書の言葉は何を言っているのでしょうか。そもそも「幸い」という翻訳自体が間違っていたとも言われています(本田哲郎)。「幸い」と訳されている元々のギリシャ語「マカリオス」の意味は、「神から祝福されている」です。そのために「幸い(幸福)」と翻訳されたのですが、そもそも「祝福」という言葉自体、あまりよく分かっていないのではないのでしょうか。

もちろん今日も、この礼拝の最後には、教会の伝統として「祝祷」と呼ばれる「祝福のお祈り」がありますが、そのお祈りによって、神様からの特別のご加護があって、事故や病気から守られて、願いが叶うというのでしょうか。言うまでもなく、そんなことはありません。ですが、それでもやっぱり、私たちは心のどこかではそれに似たようなことを期待している所もあるのではないかと思います。日本語の「祝福」は、相手に悪い言葉を投げかける「呪い」の反対語ですから、「相手に良い言葉をかける」という言葉です。聖書の中でも、「賛美」や「祝福」と翻訳されているギリシャ語「エウロゲオー」も同様です。

聖書の中では、その他にも「祝福」と翻訳されているギリシャ語やヘブライ語が、複数ありますが、この「マタイ」や「ルカ」で「幸い」と訳されているギリシャ語「マカリオス」の元となったヘブライ語「アシュレー」の語源は、石垣や家の壁を積み

上げる素材として、石材を用意する際に、「石にノミを当てないでそのまま使える」という意味なのだそうです。時間と労力をかけて形を整えなくても、そのまま使って大丈夫。だから、ラッキーでハッピー。言い換えれば「神様のおかげ、神様の力が働いているとしか思えない」ということでしょうか。そのことを考えると、「マタイ」でも「ルカ」でも、ここには困難な状況にある様々な人々が描かれていますが、イエス様はそれぞれの人々に対して「あなたたちの、そのままの感性で間違っていない」、「今、持っている感性のまま、まっすぐ進んで行って下さい」、「そこに神様からの力がある、神様の目が注がれている、神様が共にいて、働かれているから」と呼びかけておられるのだと理解することができます。

そして、そのような逆説的な神様の視点、価値観、働きは、福音書だけではなく、パウロの手紙の中にも記されています。今回の聖書は、伝道者パウロによるコリントの教会の人々に宛てて書かれた手紙の一節でした。12章9節の「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れる」という言葉や、12節の「私は、弱い時にこそ強い」という言葉は、有名な言葉ですし、この言葉だけで落ち込んでいる時に、慰めと励ましを与えてくれた聖書という言葉として、大切にされている方々も沢山おられるのではないかと思います。パウロがこの言葉を記した背景として、そこにあったのは、パウロに対する反対者たちの存在だったようです。そもそもコリントの教会というのは、家庭集会のような小さな集まりだったようですが、かつてパウロが創設した教会でした。そしてパウロが不在の間に、そこに別の伝道者がやって来て「パウロなんて、実は大したことはない。私たちの伝える教えこそ先祖伝来の正統的なものだ」と、パウロの陰口を言ったようです。例えば、「パウロは文章を書くとき力強く、手紙の中では偉そうな事を言っているけれども、実際に会って話してみると弱々しくてつまらない男に過ぎない」(2 コリント 10:1, 10)ですとか、「聖霊に満たされて異言を語ったり、病気を癒したり奇跡を行ったりすることもないじゃないか」とも言われていたようです。パウロにとっては、自分への反対者たちが自慢し、正当性の根拠とするそれらのものが、自分には無い、欠けているものであることを自覚し、そのことを認めていました。そして彼はそれらを自分の「弱さ」と言い、「私自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません」(12:5)と認めていました。

もっとも、1節から4節にかけては、「14年前に第三の天にまで引き上げられた人を知っていて、そのような人のことを誇ります」など、よく分からないことが書いてありますが、これはパウロが「私自身については誇りません」と言った手前、自身のことを誰か他の人の話として書いていると考えられています。と言うのも、恐らく7節で「啓示と棘」と書かれているように、パウロは病気か何かのために、時々体に激しい痛みを感じることもあり、そのために意識が朦朧とする中で、何かを見たり感じたりすることがあり、それを神の啓示と受け取っていたのではないかと「ダ

マスコに向かう途中で雷に打たれたようになり、光の中でイエス様と出会い、目が見えなくなり、その後、目から鱗のようなものが落ちた」という「サウロ(パウロ)の回心」(使徒言行録 9 章, 22 章, 26 章)のお話にも通じています。そういう経験のあったパウロは、肉体を離れてか、肉体のままか、よく分からないけれども、天上界にまで行くような特別な経験をした(12:2-4)。そのことを誇ろうと思えば誇ることができるけれども、誇らない。なぜなら、そのような特別な経験や能力が、神様の恵みや力、福音の本質ではないからです。

結論として、パウロが言うのは、9 節「力は弱さの中で完全に現れるのだ」、10 節「私は弱い時にこそ強いからです」です。ここで言われている「弱さ」とは、パウロ自身の力の足りなさや欠乏ですが、一方の「力」「強さ」は、パウロのものではなく、神様から与えられるものです。そもそも、自分で自分を誇ることができるような人、地位や権力、財産や名誉、健康などを持っている人は、神を必要としていません。神を必要としている人は、自分の欠けを知り、弱さを知り、無力さを感じている人たちです(マタイ 9:12 並行)。天高く、空の彼方に、輝いている星たちの光は、昼間の明るい時には目に届くことはなく、夜の暗闇の中でしか見る事が出来ないように、常に隣にいて下さっているにも拘わらず、そこにいて下さっている神様の存在と、その力と働きに、私たちが改めて気付かされるのは、私たち自身の力が弱く、足りなくなった時なのではないでしょうか。だからこそ「神様の力は、自分自身が弱っている時にこそ発揮される」のだと思います。

そこに働く神様の力とは、負け戦を一気に形勢逆転して勝利に導くようなものではありません。宝くじに当たるようなものでもなければ、病気や怪我がある日突然、消えて無くなるようなものでもありません。むしろ、「このまま進んでも大丈夫だろうか。このやり方で合っているだろうか」と自信が持てずに不安に怯えている時に、「大丈夫」「一緒にいるよ」と言ってくれ、小さな星の光で導いてくれる。そのような力なのだと思います。

この後、歌います賛美歌「くすしきみ恵み」は、「アメイジング・グレイス」という名前で有名ですが、作詞者のジョン・ニュートンの自伝的な歌です。11 歳から父親と一緒に船に乗っていた彼は、ある時大嵐にあって難船しかけ、その中で神様に立ち返る回心を経験し、牧師となったそうです。「神の力、神の守りがある」というのは、たとえ事故や病気になっても、たとえ勝負で負けてしまったとしても、それでも絶望に終わらない、ということ。暗闇に閉ざされてしまわない、小さな希望の光は灯り続けている、ということ。「神様は私を見放していない」と信頼して、再び歩みを起こして行くこと。それが「復活(死からの引き起こし)」であり、また「弱っている時にこそ発揮される神の力」なのだと思います。いつも私たちを支えて下さっている神様と共にあって、その力を頂きながら、私たちは今日もここから小さな一歩を歩み出して参ります。